

最後に、本書執筆の原点を振り返ると、私にとって忘れてはならない人がいる。我が家のステレオ装置を私がほぼ独占することに目をつぶってくれた両親。そして都立石神井高校において英語学習を厳しく指導してくださった田中貴美夫先生に、あらためて感謝する。

2018年1月  
秋山直樹

## 本書の特色と利用法

本書で扱うのは、まず、The Beatles がレコーディングアーティストとして活躍した八年間のうちの最初の五年間に発表したオリジナルナンバー107曲の歌詞。発表順に読んでゆく。この時期には非オリジナル25曲もレコード化されているが、これらは外した。そうしないと、内容の一貫性と歌詞発展の歴史性に欠けてしまうからである。そして、同時期に録音されながら後年まで正式には発表されなかったオリジナルナンバー12曲を加えた。

実際、ビートルズが書いた歌詞をレコードの発表順に追うと、彼らの作詞力と共に作文力の進歩がよく分かる。デビュー曲の骨子は三つの短文と三つの名詞句で、使われている単語は正味18語にすぎない。文章が複雑化し始めるのは、24曲目から。そして60曲目を過ぎると、抽象的や比喩的な表現が増え、社会的テーマ、文学的描写、哲学的思考などが、単なるラブソングに取って代わる。このように、出だしが簡単で段々と難易度が上がるというのは、副的なことだが、語学教材として理想的である。

しかも、仮定法を含む各時制（未来完了、未来完了進行形、過去完了進行形を除く）、各種動詞、各助動詞（dareを除く）のさまざまな用法、各関係詞、両話法といった基本英文法の文例が、くしくも最初の95曲までに登場している。そして119曲で学べる英単語の数はおよそ1020。動詞の不規則活用形、助動詞の変化形、形容詞の比較変化形、名詞の不規則複数形、固有名詞、間投詞、短縮語などを合わせる

と、およそ1200に上る。その大部分は日常的に使われる言葉である。

歌詞の全文を、メロディーやリズムにとらわれずに、普通に文章を書く体裁で本書に掲載できればよいのだが、著作権の観点から見送っている。歌詞のもっと広い部分なり全体像を眺めるには、CD付属の歌詞リーフレットや、市販されている詩集や楽譜などを参照して欲しい。本書はそのような出版物の代りになるものではない。

全文の翻訳は、できれば、読者が自ら訳したものを紙に書いてみるのがよいだろう。自分の和訳を文字にしまとめるうちに、実際には解っていなかったことに気付くものである。そこでさらに考える。このように、他人の言葉で書かれた翻訳を媒体にしないで、自分の頭で考えて、英文を理解することが肝心である。そうした訓練を続けるうちに、英語がそのまま解けるようになる。すると、ビートルズが書いた歌詞に含まれるユーモアなども楽しめることになる。例えば *And Your Bird Can Sing* や *Got To Get You Into My Life* は、公式に出回っている対訳からでは、面白さや隠れた意味を半分も理解することができない。

本書の記述の仕方について説明しておく。歌詞の中の語句に直接的に言及する際は、イタリック体（例えば *Love, love me do.*）にしてある。〈tell somebody of something〉のように、〈 〉でくくってあるものは、言い回しなどの基本的な構成を示している。〔 〕内の数字は、本書における作品番号。「 」で挟んであるのは、私の訳語。一方、他書からの引用の前後には、『 』を用いた。また、著作物の題名は、英語のものは大文字だけで記し、日本語のものは“ ”でくくってある。

文法用語がたくさん出てくる。知能が十分に発達した後に外国語を習得するには、体系的で能率の良い学習が助けになると考えるからだ。そして、私からのアドバイス。ありふれた英和辞典で構わないので、頻繁に辞書を引く習慣をつけること。たとえ基本単語についてであっても、自分の記憶に100パーセントの自信がない場合は、面倒臭がらずに辞書をめくる。その積み重ねが必ず英語力の向上に繋がる。

また、音読を心がけるべきだ。そしてその際、音ごとの口の形と舌の位置が正しいことに注意し、各音の違いを耳で確認することが肝要である。この訓練は聞き取りにも役立つ。